

序文…島上善五郎『昭和史の証言』

—島上善五郎のたどった軌跡—

五十嵐 仁（法政大学大原社会問題研究所教授）

「プログ 五十嵐仁の転成仁語」―掲載2013年4月25日（木）

〔以下の論攷は、島上善五郎『昭和史証言―島上善五郎のたどった

軌跡』（図書新聞刊、2013年3月）の序文です。〕

働く庶民の「苦闘の書」

「島善」の愛称で呼ばれていたという。本名は佐々木善五郎。島上勝治郎の長女・邦と結婚し

て島上姓となった。

島上善五郎（以下、島上と略称）は、大正から昭和、戦前から戦後へと続く困難な時代に東京市電を拠点とした労働運動の指導者として頭角を現し、戦後は日本社会党結成に参画して代議士となる。一九五〇年に労働組合全国組織として結成された総評（日本労働組合総評議会）の生みの親の一人であり、その初代事務局長として知られている。本書は、その島上の自伝である。

本書は、秋田の寒村で生まれた少年の一代記であり、地方から中央に出てきて身を立て名を上げることができた人物の昭和史への証言として読むことができる。その意味で、島上の生涯は日本の近代化における典型的な人間類型の一つだといえよう。

しかし、その身の立て方は労働運動への参画であり、労働組合や政治に関わる活動を通じてのものであった。その「志」は虐げられていた働く人々の側にあり、支配層のなかに入り込むのではなく、逮捕や投獄などの弾圧にもめげず権力に抗して社会的な地位を高めていった働く庶民の「苦闘の書」である。ここに島上の真骨頂がある。

また、本書は戦前から戦後にかけての政治史として読むこともできる。とりわけ、社会党結成に加わって衆議院議員となった戦後において、このような特徴は顕著だといえる。本書の記述の対象になっているのは、社会党大会で中央本部統制委員長に選出される一九七〇年頃までだが、それまでの間、島上は社会党議員として、あるいは、左派に属する社会党の幹部として、

数多くの政治的な出来事に関わってきた。

なかには、当事者としての証言や感想などもある。外から見た評論ではなく、内側からの観察にはかならない。これも本書が持つ大きな特色であり、重要な意義の一つだと言えよう。

このような本書は、大きく分けて三つの部分から成り立っている。第一は戦前の上京から東交を中心とした労働組合運動への参画であり、第二は戦後の総同盟や総評など労働組合全国組織の幹部としての活動であり、第三は社会党衆議院議員としての足跡である。

労働組合運動への参画

第一の上京から東交を中心とした労働組合運動への参画については、第1章「市電自治会と歩む」、第2章「東交前史の終幕」、第3章「長い荊の道」で扱われている。

島上は一九〇三（明治三六）年二月六日、「半農半漁の貧しい村」である秋田県南秋田郡天王村下井戸で生まれた。農業を営む佐々木善治の三男で、六人兄弟の五番目であった。

東京に出てくるきっかけは、秋田市役所が行った東京市電の補助車掌募集である。島上はこれに応募し、高等小学校を一年で中退して上京する。勤務地は本所出張所であった。「田舎出の純情できまじめな補助車掌だから遅刻・欠勤はなく、残業は率先して引き受ける模範車掌の勤務ぶり」だったという。

この「田舎出の純情できまじめな」性格は、労働運動に加わり政治家となっても変わらなかったようだ。島上と同期で、後に社会党から自民党に転じた鈴木善幸元首相は、「島上善五郎君は、素朴で誠実な人柄で、情誼に厚く温かい人間性の持ち主である。他人の面倒見が良く、それだけに同僚・後輩の信望は厚く、公私にわたって調整役として高く評価され重きをなしていたように思う」と振り返っている。

こうして働きはじめた島上は、その後、人生を左右する決定的な人物と出会う。二年前の市電争議を指導して誡首され、「市電相扶会」を作って労働組合の再建に取り組んでいた島上勝次郎である。「おやじおやじと尊敬され」ていた勝次郎に目をかけられた島上は強い影響を受けた。労働組合運動へと誘われることになる。

一九二三年五月、島上は第四回メーデーに有志で参加して「処女演説」を行い、九月一日の関東大震災で勝次郎を失ったものの、翌年五月には一万二〇〇〇人近い「市電従業員自治会」の結成に成功。「君は島上の後継者だから」と言われて本所支部長兼本部執行委員に選出された。

その後、大道電気局長排撃運動でブタ箱入りとなり、二五年には治安維持法反対運動で誡首される。この時、島上は二二歳であった。その後、自治会本部の常任書記となって専従活動家としての道を歩み始めるが、二六年夏に右派との対立で解任、左派は市電自治会分裂反対同盟を結成して対抗、半年後に合同して執行部の大半を制した。

このとき、島上は労働農民党の青年部長にも選ばれている。市電自治会は「労働農民党支持」を決めたものの、右派は総同盟や社民党、一部は中間派の日労党、左派は評議会、労農党との連携を強めるという構図だった。「私たち数名の者は、このときすでに共産黨員として市電細胞をつくり、職場闘争の組織と、市電労働者の労農党への大量入党促進などの指導を活発に進めていた」という。

その後、市電自治会は東京交通労働組合（東交）となるが、右派は二七年に「市電自治会現実同盟」を結成したため、二度目の分裂となって本部事務所を追いつけられ、組合員も半数以下になった。さらに、二七年には「三・一五事件」で自治会左派の活動家が検挙され、島上も二年間の服役を余儀なくされる。

保釈で出所した島上は東交の書記局に入り、労働組合の全統統一運動、東京無産協議会の結成などに取り組んだ。しかし、三七年には人民戦線事件による大量検挙に連座して逮捕・投獄され、未決のまま一年半獄につながれた後、保釈となる。その後、日本生命の臨時外交官、南旺映画撮影所の進行係などを経て、軍需工場の徴用工となって戦争の終結を迎えるのである。

なお、戦前、共産黨員として活動していた島上は、戦後、日本社会党の結成に加わる。この間の変化は興味のあるところだが、その経緯については何も書かれていない。

労働総同盟から総評へ

第二の労働組合全国組織としての総同盟や総評での活動については、第4章「労働運動畑で」が明らかにしている。ここでは、戦争直後における労働運動の激動の時代が、島上個人の体験を通して活写されている。

先ず島上が取り組んだのは、労働組合の再建であった。玉音放送の「二、三日後に」高津正道が島上宅を訪れ、「談合の結果、彼は単一の社会主義政党的結成にむけて、私はその母体となる労組再建へと歩み出すことを誓いあった」という。

こうして「一週間もたたぬうちに」、東交再建準備会ができるが、戦時中の「産報」関係者を中心にもう一つの準備会もできる。左右を代表する二人に一任となったが、左派の代表は島上で、運動方針を起草した。結局、二つの準備会は合体して四五年一月に東交が再建される。海員組合に次ぐ、極めて早い再建であった。

一九四六年五月には復活メーデーが取り組まれ、島上は統一メーデー準備会の常任実行委員の一人となる。「事務局を東交本部においた関係で私を中心となつて準備を進め、まず中央会場を皇居前広場と決めて下検分をした」という。このメーデー中央集会には五〇万人が参加した。「雨模様について続々とくり込む組合員、定刻午前一〇時には、見渡すかぎりの人の海、旗の

波となる。壇上の私は夢見るほどの感激で胸が詰まり、開会の辞に何を言ったかもわからない」と、島上は書いている。

この中央メーデー実行委員会を解散せずに戦線統一準備会にしようと、五月三日に話がまとまった。しかし、前年一〇月には全国労働組合結成中央準備委員会が発足しており、これとは別に全国産業別労働組合会議準備会が成立していた。島上らは「全的統一の望みを棄てなかった」ものの、総同盟準備会の主流であった松岡駒吉や原虎一らは慎重で、「もともと反共色の強い諸君で、共産党系からは戦前のボス排除の声が高まるなど、このチャンスはあつけなく逃してしまった」。こうして、四六年八月に総同盟と産別会議が発足し、島上は総同盟の執行部に入る。

一九四七年一月十五日、「二・一ゼネスト」の支援に向けて全国労働組合共同闘争委員会（全闘）が結成されるが、島上は総同盟から常任として参加した。しかし、マッカーサーによる中止命令が出されてゼネストは不発に終わる。「総同盟の松岡会長らは当初から批判的であったが、高野や私たちはたたかいの成功のために協力を惜しまなかった」という。

この頃から、産別会議内に民主化運動の動きが始まり、「総同盟はこの機をとらえて中央委を開き、『組合民主化運動』を打ち出して拍車をかけた」。このようななかで、四九年一月、私鉄総連の呼びかけで戦線統一懇談会が開かれ、全国労働組合統一準備会が発足した。これが総評結成に向けての第一歩になる。

総同盟から準備会に出ていた島上が、「数少ない戦前派でかつ年長であったせいか、いつの間にか私がまとめ役のような形にされてしまった」ことは注目される。五〇年三月の準備大会で島上は事務局長に選ばれるが、その伏線はここにあったといえる。七月の大会で、総評は正式参加一七組合、オブザーバー一七組合が参加して正式に結成される。ここでも、島上は初代の事務局長に選出された。

社会党衆議院議員として

第三の社会党衆議院議員としての足跡については、第5章「社会党と歩む」、第6章「天国から地獄へ」、第7章「社会党の再建へ」、第8章「高揚から退潮へ」が詳しい。とりわけ、左右社会党の分裂と統一に至る経過とその間の活動を記述している第7章には重要な証言や指摘が多く、本書の中心をなしていると言って良い。

島上は社会党結成当初から中央執行委員に選任され、四六年四月の戦後最初の衆議院総選挙に東京一区から立候補した。しかし、この選挙では落選し、翌四七年四月の戦後二度目の総選挙で東京六区から立候補して当選。社会党は第一党になって片山内閣が成立する。党内の左右対立が激化するなか、島上は「左派の五月会に属してその有力メンバーと目され」るようになっていく。

昭電疑獄事件で芦田内閣が倒れ、四九年一月の総選挙で社会党は四八議席と惨敗した。島上もこの選挙で落選し、総同盟本部の専従に戻る。もし、この時当選して代議士を続けていたら、島上は総評の初代事務局長になっていなかったかもしれない。これについて、「総評結成時には議席を失っていたが、次回の雪辱戦を心に決めていたのでいわば片足を国会に入れている状態であったため、総評第三回大会では私は事務局長を高野君に譲った」と書いている。

この後、社会党の第一次分裂、平和三原則（中立堅持、軍事基地提供反対、全面講和実現。後に再軍備反対を加えて四原則）と講和・安保条約をめぐる左右の対立、第二次分裂、「血のメーデー」事件、社会党左派の躍進、バカヤロー解散、造船疑獄、左右社会党の統一、小選挙区制法案粉碎闘争、日ソ国交回復、六〇年安保闘争、浅沼刺殺事件と構造改革論争など、戦後政治を彩った事件や社会党の動きが記述されている。この間、島上は当選を重ねて「『八勝四敗』一九年余の議員生活」を送り、社会党幹部や代議士として重要な役割を果たした。そこには、興味深い証言もある。

たとえば、レッド・パージや共産党中央委員の追放、再軍備の動きに対して、「社会党はこれに機敏に対応したとはいえない。つまり党内論議に時間を費やし、対応策について迅速適切に応じえなかったといつてよい」と、反省している。また、「警察予備隊設置では、治安維持の立場から賛成するが……将来憲法違反の軍隊に発展する危険性については、一言も触れえなかった」と書いている。いずれも、重要な指摘である。

また、社会党が左右に分裂した五一年一〇月の臨時党大会についての記述も興味深い。二日目に右派は大会の散会を宣して事前に準備してあった浅草伝法院に移って分裂する。しかし、左派もその前日の夜、労働者同志会と党青年部の合同会議を開き、「平和四原則に反する『白青』（講和条約賛成、安保条約反対）の態度を決定したときは社会党を勤労者の党と認めることはできない、そのときは『新しい労働者党を結成する』との重大決定をくだしていた」という。

こうして分裂した左右社会党は、やがて統一に向けて動き出すものの「しばらくは沈滞気味であった」。「このとき、両者統一を強く刺激したのはイギリス労働党代表団の来日であった」という。この代表団を「右社へも申し入れて両社共同で歓迎」しただけでなく、代表団の離日に当たっては、「使節団の統一への忠告を素直に受け入れ、今後熱意をこめて統一のために努力する、との委員長談話を発表した」からである。

さらに、社会党内外に大きな波紋を引き起こした構造改革論争について、島上は「長期的に見ればこの論争の激化は党内派閥の複雑な変化を生み、役員人事や党の日常活動にも波及し、党を支持する広範な国民大衆には理解を得られず、党エネルギーの浪費となった面も多い」と、否定的に総括している。しかし、この問題についての島上自身の見解や関わりについては、明らかにされていない。

なお、朝鮮戦争について、「韓国軍が三八度線を越えたのに北朝鮮軍が反撃し」と書かれている。今日では、逆の経緯であったことが明らかになっており、当時の時代的な限界を反映した

記述だと言えよう。

最後に島上は「筆をおくにあたつて」として、「いま、労働陣営は全的統一を目標に大きく動きつつあり、総評結成に苦勞した者の一人として複雑な淋しさを感じるが、この世紀の大統一が働く者の要望と念願に應える全的統一であることを切実に願う」と書いている。本書が刊行された翌年に連合は結成された。しかし、それは島上が望んでいたような「働く者の要望と念願に應える」ものになっているだろうか。

島上が結成に加わり「夢と希望」を託した社会党は社会民主党に衣替えし、今や消滅の危機を迎えつつある。労働組合の社会的な存在感も発言力も低下し続けてきた。「労働運動、冬の時代」と言われて久しい。

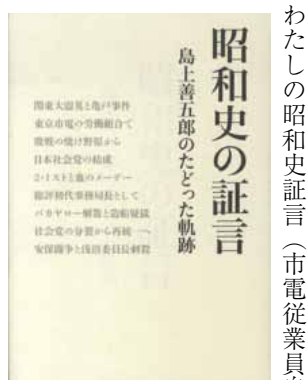
このような労働組合運動のあり方を反省し、先人の苦闘の足跡を振り返り、再検証するためのよすがとして、また、反転・攻勢に向けての教訓を学ぶ教材として、本書が活用されれば幸いである。そのことを誰よりも強く願っているのは、泉下の島上善五郎であるにちがいない。

二〇一三年一月二三日

▽内容説明——「紀伊国屋WEB STORE」より、出版社・図書新聞

本書は、秋田の寒村で生まれた少年の一代記であり、地方から中央に出てきて身を立て名を上げることができた人物の昭和史への証言として読むことができる。その意味で、島上の生涯は日本の近代化における典型的な人間類型の一つだといえよう。

目次



わたしの昭和史証言（市電従業員自治会とあゆむ―戦前抄1；東交前史の終幕―戦前抄2；長い荊の道―戦中抄；労働運動畑で―戦後抄1；社会党とあゆむ―戦後抄2；天国から地獄へ―戦後抄3；社会党の再建へ―戦後抄4；高揚から退潮へ―戦後抄5）；島上善五郎を語る（コロンボで食った同じ釜のメシ；「総評運動」の産みの親；島上善五郎君を語る；「夢と希望の七〇年」によせて；思い出懐かしい島上さん）

著者紹介

島上善五郎「シマガミゼンゴロウ」

明治36年12月秋田県で生まれる。大正13年東交労組の前身市電自治会を結成し本所支部長兼本部執行委員となる。昭和12年人民戦線事件で逮捕投獄される。昭和20年日本社会党結成に参加し中央執行委員に、また東交労組を再建し書記長となる。昭和25年総評結成に参画し初代事務局長となる。昭和22年東京第6区から衆議院議員に初当選。以後、通算8回当選。昭和45年社会党中央本部統制委員長となる。社会党顧問、都市交顧問、東交顧問。平成13年湯河原にて死去（本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです）